

# 北ノ久保遺跡

長野県上高井郡高山村  
北ノ久保遺跡発掘調査報告書

1 9 8 6

長野県北信土地改良事務所  
上高井郡高山村教育委員会

# 北ノ久保遺跡

長野県上高井郡高山村  
北ノ久保遺跡発掘調査報告書

1 9 8 6

長野県北信土地改良事務所  
上高井郡高山村教育委員会

## 序

長野県上高井郡高山村の高井土地改良区は、場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和57年度に水中区の小布毛遺跡、昭和58年度に堀之内区の八幡添遺跡について、本年度においては牧区の北ノ久保遺跡の緊急発掘調査を、県営は場整備事業の実施に先立って、事業主体者である長野県北信土地改良事務所より、高山村教育委員会が調査の委託を受け、発掘調査を実施し、記録に残すことになりました。

この発掘に伴う経費は、事業主体者である長野県北信土地改良事務所が負担し、農家負担分にかかわるものについては高山村教育委員会が、国及び県の補助金を得て負担することになりました。したがって、この事業は二本立ての事業ということになりますが、発掘調査はすべて高山村教育委員会が主体となり、新たに編成しました北ノ久保遺跡発掘調査団に委託して実施することといたしました。

今回調査対象となりました北ノ久保遺跡は、本村牧地区の松川左岸に所在しており、以前から知られている遺跡ですが、その内容については不明な点が多く、この発掘調査を待たねばならない状況にありました。調査の結果につきましては本書に詳しく報告されているとおりですが、この調査によって、遺跡の全様がほぼ解明されたものと考えます。

発掘調査は、春からの休日を利用しての試掘確認調査に始まり、農閑期でもある夏休み中に、本格的な発掘調査が炎天のもとで行われました。本調査報告書を刊行するにあたり、発掘調査団のみなさんをはじめ、調査にご協力をいただきました長野県教育委員会文化課、長野県北信土地改良事務所、高井土地改良区、牧区のみなさん等、関係者各位に厚くお礼申しあげ、本報告書が広く活用されることを願う次第です。

なお、春以来この調査に参加されてきた須坂高校郷土部員の一人である坂詰理英さんは、夏の発掘調査を前にして、海水浴中に突然不帰の人となってしまいました。本報告書を墓前に捧げ、心から冥福をお祈り申しあげたいと思います。

昭和 61 年 2 月 11 日

上高井郡高山村教育長　日　向　廣

## 例　　言

1. 本書は長野県上高井郡高山村高井土地改良区県営は場整備事業に先立って、昭和60年度事業として実施した「北ノ久保遺跡」の発掘調査報告書である。

2. 本書は関孝一が中心になって編集し、下記のとおり分担執筆した。

黒岩　博（第1章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）

郷道哲章（第2章Ⅰ・Ⅱ3）

山岸善一（第2章Ⅱ3）

関　　孝一（第3章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・第5章）

綿田弘実（第2章Ⅱ1・Ⅱ2・第4章Ⅰ・Ⅱ1・2・3・参考文献）

3. 北ノ久保遺跡は從来、北之久保・北の久保・北ノ久保等と記され、統一を欠いていたが、本調査報告書をまとめるにあたり、地籍名に使用している「北ノ久保」とした。但し、弥生土器出土地の北ノ久保B地点は領原460番地（山崎竹千代氏所有）、縄文時代遺物出土地の北ノ久保C地点は領原473番地（須加尾影治氏所有）に所在している。

4. 第8図の出土遺物実測図番号は、下記例のとおり出土地点を略して番号の右に付した。

（例）北ノ久保遺跡A地点…A，　北ノ久保遺跡C地点…C，　試掘調査坑No31…31。

また、PL8の番号は第8図の番号と符合し、同じくPL9の既出遺物番号は第9・10図の実測図番号と符合する。例えば、PL9の9-1は第9図1と同じ。なお、PL8・PL9の縮尺は1：2である。

5. この調査にあたっては、下記の方々及び諸機関から多大のご協力をいただいた。ご芳名を記し、感謝の意を表す次第である。（アイウエオ順）

（機関）　高井土地改良区・高山村歴史民俗資料館・長野県北信土地改良事務所・長野県埋蔵文化財センター・牧区

（個人）　大竹憲昭・宇賀神誠司・関　賢司・小松宏昭・竹内一徳・水澤祝彦

## 目 次

序 .....	I
例 言 .....	II
目 次 .....	III
第1章 発掘調査の経過 .....	1
I 遺跡発見の由来 .....	1
II 発掘調査に至るまでの経過 .....	2
III 発掘調査団 .....	3
IV 発掘調査日誌 .....	3
第2章 遺跡の環境 .....	6
I 自然環境 .....	6
II 歴史環境 .....	7
1. 牧地区の考古学的調査 .....	7
2. 松川上流域の遺跡群 .....	9
3. 牧集落の発生と耕地開発 .....	13
第3章 遺跡の状態 .....	18
I 試掘確認調査区域 .....	18
II 北ノ久保遺跡A・B地点 .....	20
III 北ノ久保遺跡C地点 .....	22
第4章 遺 物 .....	23
I 出土遺物 .....	23
II 関連遺跡の既出遺物 .....	24
1. 北ノ久保遺跡 .....	24
2. 旧牧分校プール地点 .....	25
3. 牧遺跡 .....	27
第5章 まとめ .....	29
(参考文献) .....	31

## 挿 図 目 次

- |  |                      |
|--|----------------------|
| 第1図 遺跡付近地図（2万5000分の1）                    | 第6図 北ノ久保遺跡A・B地点全体測量図 |
| 第2図 北ノ久保遺跡付近の遺跡分布図                       | 第7図 北ノ久保遺跡C地点全体測量図   |
| 第3図 牧区地字図（作成年不詳）                         | 第8図 出土遺物             |
| 第4図 領原地籍地番図                              | 第9図 関連遺跡既出遺物（1）      |
| 第5図 北ノ久保遺跡A地点No.3グリット<br>西壁セクション（縮尺2分の1） | 第10図 関連遺跡既出遺物（2）     |
|  | 第11図 関連遺跡既出遺物（3）     |

## 表 目 次

- |                                 |
|---------------------------------|
| 第1表 牧地区遺跡の時代別分類                 |
| 第2表 北ノ久保遺跡付近の遺跡分布地名表            |
| 第3表 牧村耕地面積および石高の移動（検地帳による）      |
| 第4表 高井郡牧村検地帳に記載されている地名（検地帳より抽出） |

## 図 版 目 次

- |                               |                     |
|-------------------------------|---------------------|
| PL 1 1. 北ノ久保遺跡A・B・C地点         | 2. 北ノ久保遺跡A・B・C地点    |
| PL 2 1. 北ノ久保遺跡A・B地点           | 2. 北ノ久保遺跡C地点        |
| PL 3 1. 北ノ久保遺跡A地点             | 2. 北ノ久保遺跡A地点        |
| PL 4 1. 北ノ久保遺跡A地点No.3グリット土層状態 | 2. 北ノ久保遺跡A地点湧水地     |
| PL 5 1. 北ノ久保遺跡B地点             | 2. 北ノ久保遺跡B地点弥生土器出土地 |
| PL 6 1. 北ノ久保遺跡B地点             | 2. 北ノ久保遺跡B地点        |
| PL 7 1. 北ノ久保遺跡C地点             | 2. 北ノ久保遺跡C地点        |
| PL 8 出土遺物                     |                     |
| PL 9 既出遺物                     |                     |

# 第1章 発掘調査の経過

## I 遺跡発見の由来

上高井郡牧地区に所在する北ノ久保遺跡は、村内ではかなり以前から知られている遺跡で、重要な位置づけがなされてきた。「上高井誌」では次のように記している。「高山村牧・北之久保—松川扇状地の奥深い牧部落より弥生後期瓈形土器が単独出土した。器高16cm程度のもので、口縁が発達し、頸部に一条の横描簾状文帯が繞るのみで、他はすべて横描波状文で充填される典型的箱清水式瓈形土器である。」

しかし、この遺跡が発見された動機や内容についてはあまり知られていなかった。たまたま、この地域が県営は場整備事業の対象地になり、遺跡の保護が必要になったことから、北ノ久保遺跡に対する関心がわかつに高まるにいたった。北ノ久保遺跡が発見されたのは昭和24年のことであった。そのきっかけになったのは、高山村牧在住の黒岩清人氏が山崎竹千代氏所有の窪地に、水抜け防止のコンクリート壁を築くため、溝掘りをした際、そこから弥生後期の箱清水式土器片が一括発見されたことによるものである。遺物はこれ以外に発見されなかつたが、この報告をうけた山岸善一氏は、発見当時のことについて次のように述懐している。

「この弥生式土器は昭和24（1949）年1月16日、高山村牧・北の久保の水田で、用水側溝改修工事の際に、工事人・黒岩清人君が土器破片を発見し、これらの破片を探集したものを牧分校に寄贈された。後日、牧分校の私（山岸善一教諭）が寄贈された破片により復元したものである。」

昭和24（1949）年9月、上高井教育会は、上高井教育会郷土史同好会と共催で、高井村・山田村地域の古代遺跡実地踏査講習会を9月17日・18日両日の日程により開催いたしました。講師先生は登呂遺跡調査主任・東大講師の八幡一郎先生でした。この講習会二日目の9月18日に牧地城の出土品ならびに北の久保出土の弥生式土器の出土現地踏査が行われました。講師八幡先生はこの土器について、文様は当地方の弥生式土器にほどこされた横目文様が工具で浅く並行波線文・直線文を表わした様式的なものであり、その作も優秀なものであることを称賛いたされました。」

ところが、その後、昭和35年になって、同地点より東方約100mの松川沿岸において、須加尾影治氏は同氏宅地内で打製石斧・剥片石器・四石を各1個発見した。この時は土器類等は発見されなかつたが、打製石斧には山岸善一氏によって、次のような注記がみられる。「昭和三十五年六月十二日 北之久保須加尾影治君 須加尾友三助氏宅 西隣りの畠より出土」

したがって、北ノ久保遺跡での遺物出土地点は2地点に分れ、今回の調査に際しては、これ

を識別するうえで、弥生土器の出土地点を北ノ久保遺跡A・B、打製石斧の出土地点を北ノ久保遺跡Cと称することにした。弥生土器の出土地点をA・Bに細分したのは、地形の段差によるもので、弥生土器は下段部分のB地点で出土している。

発見された遺物は山岸善一氏の丁重な保管のもとに、旧高井小学校の郷土室に収蔵されてきたが、同小学校が合併のため廃校になった後は、新設の高山村歴史民俗資料館に移され、収蔵品の中に混在されたままになっていた。昭和59年に村教育委員会が主体になって行った村内遺跡詳細分布調査に際して、綿田弘実氏は収蔵を再分類し、改めて北ノ久保遺跡の出土品を確認した。以上の経過をふまえて、県営ほ場整備事業に伴う遺跡の保護のために、今回の発掘調査が行われるにいたったわけであるが。この調査を機会に、箱清水式土器の接合と復元が改めて須坂市立博物館学芸員・黒澤正三氏によってなされ、完成した。

## II 発掘調査に至るまでの経過

高井地区県営ほ場整備事業が行われている高山村は、上信越高原国立公園の「南志賀温泉郷」として知られているとともに、平垣部はりんご、ぶどうを基幹とする果樹中心の農業が展開し、県下でも有数の産地となっている。ところが、この地域も経済の高度成長期になると、長野市の近郊に立地することから兼業化が進み、農業後継者の不足をきたすことになった。この大きな変動に加えて、土地基盤が未整備なため、機械化が遅れ、荒地が目立つようになり、不安定な農業経営の状況が顕著になってきた。

そのため、農業生産基盤を整備し、育苗や耕乾燥調整等の施設と合せて、稲作の機械化による一貫体系を確立することが急務とされるにいたった。もちろん、稲作農業はほとんどの農家が関係していることであり、その近代化は農村全体の近代化にもつながり、省力化された労働力は水稻以外の農業規模拡大にむけられ、農業経営の安定に資することができる。それは、ひいては高速道路の整備計画が進むなかで、生産性の高い都市近郊型の農業へと発展する可能性があり、優良農用地の確保をはかることにも関連が深いのである。

こうして、高井地区県営ほ場整備事業は、高山村における農業者の総意により、昭和56年度から着手され、今年で5年目をむかえることになったが、本年度は牧区の頓原・藤沢・北ノ久保地籍の約15haが実施予定地区に入れられた。この事業は一時利用指定との関連から単年度工事で進められ、国からの割当事業費に対しては、国・県から72.5%の補助があり、残りの27.5%については農林漁業金融公庫からの長期借入金で充当し、年利率6.5%で5年据置き、20ヵ年の元利均等償還になっている。また、この工事にあたり、昭和60年7月10日、北信土地改良事務所において工事入札が行われ、株式会社北条組が工事を施工することになった。

ところで、このようにほ場整備事業が進められるなかで、北ノ久保遺跡が施工区域内に所在していることが判明し、その保護について検討されることになった。そこで、昭和59年度にお

いて長野県教育委員会文化課を中心に、長野県北信土地改良事務所、高井土地改良区、高山村教育委員会、牧区等の関係者によって協議され、北ノ久保遺跡の保護についてはほ場整備事業に先立って発掘調査を行い、記録に残すことになった。この保護協議にもとづき、昭和60年6月11日に、高山村教育委員会は事業主体者である長野県北信土地改良事務所との間に発掘調査の委託契約を結んだ。また、農家負担分にかかる発掘調査は国・県の補助を得て村が行うことになったが、発掘調査は高山村教育委員会が新たに編成した北ノ久保遺跡発掘調査団によって進められることになった。

### III 発掘調査団

昭和60年6月11日、高山村教育委員会は長野県北信土地改良事務所との間に発掘調査の委託契約を結ぶにあたって、次のように発掘調査団を編成した。

#### 北ノ久保遺跡発掘調査団（アイウエオ順）

参 与 山 岸 善 一

団 長 間 孝 一

調査員 荒井 宏・黒岩 博・黒沢正三・黒沢晴美・郷道哲章・小林重義・滝沢田助・山崎正太郎・山崎大五郎・綿田弘実

作業員 麻山智闇・桂本真司・倉田 篤・黒岩佐智子・黒岩富三・坂詰理英・清水春樹・高橋由紀・田幸慶子・千葉剛成・平岡千枝・藤沢きよ・宮川志げ・山崎市蔵・山崎市兵衛・綿田美季

### IV 発掘調査日誌

6月11日 (火) 晴 午後1時30分より高山村役場総合センター2階の研修室において、土地改良区、村教育委員会、発掘調査団の各関係者が集まり、発掘調査について打合せを行った。また、同時に発掘調査の委託契約も行われた。北ノ久保遺跡は過去に弥生土器等の発見があり、村内では知られた遺跡である。しかし、遺跡や遺物については不明な点が多く、発掘に先立って、どうしても遺跡の所在地や範囲の確認を行う必要があった。

そのため、打合せ終了後、ほ場整備計画との調整をはかるため、関係者全員で現地へおもむき、遺跡と地形的に一体をなすと思われる頬原地籍一帯を試掘することとした。なお、北ノ久保遺跡はこの頬原地籍の東端に所在しており、北ノ久保地籍に所在していないことが判明したが、遺跡の名称はこのまま使用していくことにした。今後の日程として、試掘確認調査後、8月5日に結団式を行い、発掘は8月6日から12日の7日間とした。

6月16日 (日) 晴 午前9時に現地へ集合し、範囲確認のための試掘調査を開始した。調査

はまず、高山村果樹組合の小型バックホーで水田一枚毎に1試掘坑をあけ、その後を調査員や作業員の手仕事で遺物や遺構の存在を確認するのである。

確認調査はほ場整備対象区の最北端にあたる松川の下流域から着手し、試掘坑No.1からNo.31まで完了した。全般に遺物の検出は少なく、No.3で黒曜石片、No.4・5・10・13・16から土師器の小片が発見されただけであった。これらの遺物が検出された地点は、地形が窪地状になるところで、他所と較べとくに黒色土が厚く堆積していた。窪地状地形の状態から旧河跡と思われ、遺物の残片は上から流されてきたものではないかと考えられた。遺跡としては散布地に属し、遺物がきわめて稀薄なことから、この地域での発掘調査は不要いものと判断した。

6月23日 (日) 曇り　午前8時30分に現地へ集合した。昨日の梅雨もおさまり、1日中安定した曇り空であった。今日は試掘坑No.31からNo.55までの確認を行った。この地点は全般に黒色土が浅く、表土から下はすぐに礫含黄砂土層に達した。この礫含黄砂土は松川の氾濫によって堆積したもので、この下層においては遺物包含層が存在しないと判断された。この辺の地形は、松川の河岸線が蛇行し、段丘状の平地に窪地状の旧河跡が刻まれている。この窪地形に設けられた試掘坑はNo.43～45、No.64～68が該当する。遺物はNo.31と55でわずかに検出されたのみである。

6月27日 (木) 曇り　午前8時30分に現地へ集合した。昨日の梅雨こそおさまつたが、どんよりとした雨雲がたれこめて、今にも降りだしそうな天気であった。それでも10時すぎ頃から明るくなりだし、調査は1日中続行した。今日は試掘坑No.56からNo.77までの確認を行った。土層状態は前回のNo.31～55と同じく、黒色土が浅く、遺物は全く検出されなかった。

なお、黒岩博調査員は山岸善一氏（参与）宅へおもむき、北ノ久保遺跡での遺物を発見した当時の状況等について聴取した。

7月3日 (火) 曇り後雨　試掘坑No.78からNo.98までの確認調査を実施したが、この地点も遺物包含層の黒色土がきわめて浅く、遺物は全く検出されなかった。そのため、作業の方は著しく進捗したが、午後になって降雨となり、午後3時に作業を断念した。

7月21日 (日) 曇り後晴　山岸善一氏の指導を得て、北ノ久保遺跡発見当時の地点を確認した。遺物の出土地点は2ヶ所に分れる。いずれも松川の河岸線に立地するが、その1ヶ所は、松川の河岸線を切り抜くように形成された旧河跡の窪地である。この地点では弥生後期の箱清水式小形甕が1個体分発見されている。発見者は同村牧区在住の黒岩清人氏で、窪地の水抜けを防ぐため、コンクリート壁の基礎工事を行った際に出土したという。

もう1つの地点は、松川河岸線に沿った小高い地形上に相当し、ここからは打製石斧と石匙様の剣片石器が、昭和35年6月13日に須加尾影治氏によって発見されている。遺物は縄文時代のもので、前の地点とは時代が異なっている。採集資料の注記には須加尾友之助氏宅西隣地より出土とある。

この両地点はいずれも限られた狭い範囲にとどまり、試掘坑は設定されなかった所である。しかし、遺跡が発見された状況から考えて、発掘調査をしてみる必要性は十分あるため、発掘調査の対象地区として決定した。なお、既出遺物は高山村歴史民俗資料館に所蔵されていたが、その修復や実測を調査員の黒沢正三・晴美夫妻に依頼した。

7月24日 (水) 晴 今まで行ってきた確認調査のまとめを行った。また、発掘調査にそなえて器材の点検や消耗品の購入等を行った。天幕は牧区から、平板とレベルは村役場から借用した。なお、一部、確認調査の補足を実施した。

8月3日 (土) 晴 休耕地のため草が繁茂しており、発掘区域とそこまでの通路部分の草刈りを行った。作業はかなり難行し、明日にもちこすことになった。

8月4日 (日) 晴 昨日の雑草除去を継続して行った。なお、窪地状地形をなす弥生土器出土地で、上段部分をA地点、下段部分をB地点とし、打製石斧を出土した別の小高い地点をC地点とした。午後、A・B・C地点においてグリットの設定を行った。

8月5日 (月) 晴 発掘調査にそなえて最終的な準備と点検を行い、午後3時から発掘調査計画の打合せと結団式を行った。北信土地改良事務所から会津庶務課長と構詰工務係長が出席した。

8月6日 (火) 晴 A地点の発掘を行った。この地点での土層の状態は予想に反して浅く、耕土の下はただちに礫含黄砂土層になり、遺物包含層の存在は全く期待できそうになかった。他所の例では通常、窪地状地形になる旧河跡は黒色土が厚く埋積しているが、この地点での浅い堆積は、水抜けによって黒色土が押し流された結果と思われた。ただし、A地点においては、部分的に礫含黄砂土層の下に数層にわたって黒色土帯がみられた。これはおそらく開墾時の深耕にともなう擾乱層と思われる。A地点での出土遺物はスリ鉢様沈線をもつ土師質土器片の1片のみであった。

8月7日 (水) 晴 B地点の発掘を行った。A地点と異なり、ここでは黒色土が約50cmにわたり厚く堆積していた。この黒色土は真黒な火山灰土である。弥生土器が出土しても不思議ではないような良好な状態と思われた。ところが、発掘が進むにしたがい、この黒色土の下は地下水が流れる礫層になっており、まさに沢谷の状態であった。

弥生土器が発見された附近のコンクリート壁は今も残存していたが、その地点をたんねんに発掘を試みたが、一片の土器片すら発見されなかった。地下水が激しく、遺跡としての立地条件はきわめて特異なものと思われ、既出の弥生土器は単独出土以外に考えられないものであった。

8月8日 (木) 晴 C地点の発掘を行った。炎天の続く毎日の中で、作業員の疲労も目立ちはじめた。この地点は須加尾氏宅の西にあたり、狭い畠地になっているが、所有の境が入りこんでいるため、小丘状の地形を開削して直線に区画しなおす計画になっている所である。そのため、開削予定部分のみを発掘した。しかし、遺跡の状態はあまりよくない状態

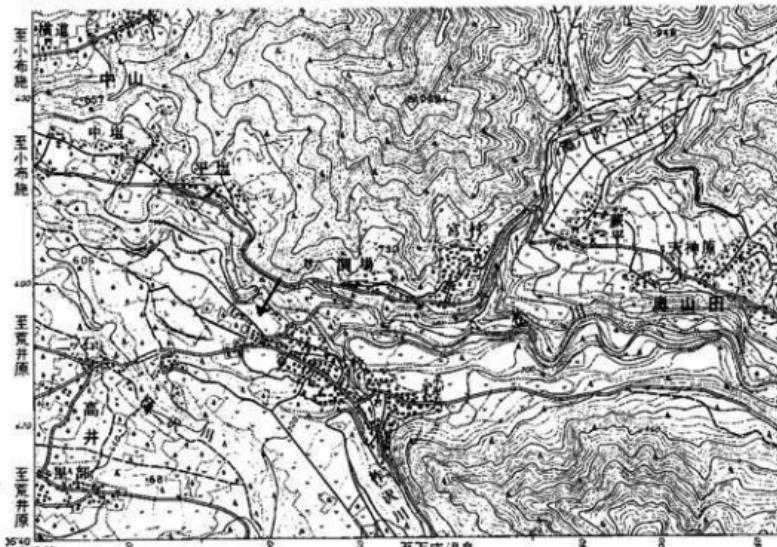
で、ごみすて場として穴が掘られており、擾乱が著しかった。出土遺物は縄文土器片1片と土師器片1片が検出されたにとどまった。北信土地改良事務所の会津課長及び高山村教育委員会の日向教育長が見学に訪れた。

8月9日(金) 晴 測量及び器材の後片づけを行った。今日で一応野外調査を完了した。なお、出土品の整理や発掘調査報告書の作成については、調査員が各自の分担に応じて作業を進め、2月中に骨子がまとめられた。

## 第2章 遺跡の環境

### I 自然環境

高山村は長野県の北東部、千曲川の東端にひろがる扇状地群のうち、松川扇状地の扇頂部に位置している。北ノ久保遺跡の所在する高山村牧地区は、その中でも最も奥まった位置にあり、「長野県町村誌」では次のように紹介している。「牧村 東は上野国吾妻郡千俣村と波風嶺、御飯ヶ嶺、黒湯山、満山、白根山等の連峯を以て壠し、西は本郡高井村と樋沢川の中央を以て壠し、南は本郡園里村と鞠子山、小倉山、雨池山、床名前山等の連峯を以て壠し、北は本郡奥



第1図 遺跡付近地図

(2万5,000分の1)

山田村、中山村と松川の中央を以て塙す。」

現在の牧の集落は松川と柞沢川の合流地点を中心にひろがりをみせているが、位置としては柞沢川にかかる子安橋付近で、北緯36度40.3分、東経138度23.5分にあたり、標高は700mを有す。気候は、年平均気温が9℃で、年降水量は900~1000mmと、全般に冷涼な雨の少ない地域である。

牧地区にかかる主要な河川には3つの河川がある。中心的な位置をしめるのは松川で、PH3度にも達する強酸性の「酸川」で、魚類は全く生息していない。また、牧地区的南西を流れ、北西の端で松川に合流する樺沢川も、PH3.5度で、松川と同様の強酸性の川である。もう1つの中性河川は、唯一の中性河川で、イワナ、ニッコウサンショウウオなどが生息している。

これらの河川によって形成された牧地区的扇状地面は、上位面と下位面に分けられ、その間に段丘崖の発達がみられる。地質は部分的にローム層が認められるが、牧の集落を中心とした地域は安山岩や石英閃綠岩を主とする火山岩からなる扇状地疊層の上を、黒色の火山灰層が覆っている。そのため、水もちの悪い乏水性の地質構造となっている。

## II 歴史環境

### 1. 牧地区的考古学的調査

北ノ久保遺跡を含む牧地区的遺跡としては、現在10遺跡が確認されているが、牧地区的遺跡や遺物について初めて集成・記録されたのは山岸善一氏であろう。山岸氏は多年にわたり旧高井小学校に奉職されていた間、旧高井村全城の遺跡を踏査され、また児童生徒の持ち寄る遺物を収集し、旧高井小学校の郷土資料室に整理保管されてきた。現在、高山村教育委員会の保存書類の中に、「上高井郡出土品目録」と題した臘写版刷りの、村内出土遺物を集成した最も古い記録の冊子がある。遺物の発見や発掘年月日をみると、昭和元(1925)年に始まり、昭和19(1944)年4月6日が最も新しいため、同年頃の集成と思われる。この中から大字牧の出土遺物を記載のままの名称で紹介すると、次のようなものがみられる。

石鎌(稻荷・強清水・南町原・山崎)、打製石斧(稻荷)、磨製石斧(稻荷)、磨り石(稻荷)、弥生式土器破片(稻荷)、埴部土器皿破片(源内)、鉄製破片(槍か)(源内)

これらをみると、戦前のうちにすでに多くの遺物が稻荷地籍を中心に採集されていたことが明らかである。

次いで、昭和24(1949)年9月現在とあり、「高井村出土品分布略地図」と題された臘写版刷りのわら半紙1枚の地図がある。おそらく高山村では初めての遺跡分布図であろう。この地図には大小19か所の遺物出土地の範囲が示され、北ノ久保地籍を含む7地点が牧地区に分布している。さきの出土品目録とともに、この地図は現在確認不可能な遺跡や遺物をいくつも含んでおり、最も信頼できる記録としてきわめて貴重である。

それから7年後、昭和31（1956）年発刊の「信濃史料」第1巻下の遺跡地名表には、牧・源内・屋知・福井原・北之久保の5遺跡が登載された。この遺跡名が牧地区における周知の遺跡として初めて公表されたものであり、範囲や地点等に多少の変更はあっても、今日まで周知の遺跡として扱われている。

昭和37（1962）年発刊の「上高井誌」歴史編では、初めて上高井郡下の遺跡や遺物が写真や実測図をとり入れて集成的に紹介され、本格的な考察が加えられた。牧地区の遺跡や遺物としては、まず縄文早期遺跡として「やち」があり、押型文土器の拓本図が掲載されている。縄文前期遺跡としては「下平」があり、羽状縄文土器の拓本図がある。また、「福井原」からも縄文前期の黒浜式が出土したとある。縄文中期遺跡としては、「牧」・「尾和」・「福井原」があげられ、いずれも加曾利E式を出土したとし、「牧」・「尾和」出土土器の拓本図を載せており。縄文後期遺跡としては「屋和」があり、県道須坂・山田線に沿った子安橋に近い地点から敷石住居らしい遺構の一部が検出され、堀之内式を主体に加曾利E式・同B式土器が出土したとある。弥生時代の遺跡には、「北之久保」から箱清水式土器が単独に出土したこと記している。これらの記述の中で、いくつかの誤りが認められる。まず、遺跡名については、「やち」・「尾和」・「屋和」はいうまでもなく屋知遺跡のことと思われる、「信濃史料」でも屋和となっていることから、それが原因になっているものであろう。遺跡の内容についても、縄文中・後期遺跡に混乱が認められる。縄文中期遺跡の項で、加曾利E式土器の拓本図は牧出土であるが、坪井遺跡の出土であり、「尾和」出土は上科ノ木の出土であって、むしろ福井原出土として扱うのが適当である。また、縄文後期遺跡の項で、「屋和」の敷石住居検出の記事は注目されるが、その地点は明らかに現在の牧遺跡の一部と思われる。これらの錯誤を生じた原因は、おそらくこの時すでに資料保管場所で混乱をきたしていたことによるものであろう。

やや間をおいて、昭和52（1977）年発刊の「牧の民俗」の歴史環境の中では、「信濃史料」登載の5遺跡の他、昭和45（1970）年に発見され、昭和48（1973）年までに第3次の学術調査が行われていた湯倉洞窟の概要が紹介された。この中では、さきの5遺跡の立地や内容が比較的詳細に記され、各遺跡の範囲が整理されている。また、遺跡の分布について考察が行われ、示唆に富む。

この前後の期間において、埋蔵文化財の保護行政上の必要から、1・2回の遺跡分布調査が行われたようであるが、いずれも既知遺跡の現地確認と机上調査の性格が強く、「信濃史料」を踏襲した内容であった。

昭和56（1981）年発刊の「長野県史」考古資料編遺跡地名表も、全村で28遺跡が登載されたが、湯倉洞窟が追加された他はほとんど変化のないものである。

昭和57（1982）年、高山村では初めての県営ば場整備事業に伴なう緊急発掘調査として、久保遺跡群小布毛遺跡が発掘された。これ以降、埋蔵文化財の保護が緊急を要す課題としてとりあげられ、翌年、村内遺跡詳細分布調査が実施された。この調査は村内全域を悉皆踏査するフ

ィールドワークと、高山小学校統合前に各小学校の郷土資料室等に収蔵され、その後の相次ぐ移動で混乱をきわめていた既出資料の整理確認を行うという、実質的な作業であった。また、「信濃史料」以前の、山岸氏による記録も参考にし、既知遺跡の範囲確定と、新遺跡の発見をめざした。この結果、城館跡も含めて、全村で65遺跡が確認された。

牧地区では上科ノ木と棚山洞窟の2遺跡が新たに加わったが、遺跡によっては地目の関係で表面採集調査が困難な場合もあり、また、調査を経ずに破壊された遺跡もあって、遺跡の範囲確定にあたっては多少の不明瞭さを残した遺跡もあった。北ノ久保遺跡も比較的古くから知られてきた遺跡であるが、そうした遺跡の1つに数えられる。そして、今回、洞窟遺跡以外では牧地区で初めての発掘調査をむかえることとなったのである。

なお、この分布調査の際に再整理された既出資料の中には、その他の牧地区出土遺物として、林道鞠子線出土の土師器、強清水出土の土師器、万座線入口出土の土師器高台付壺（内面黒色）、頓原出土の石器が認められたが、いずれも資料が稀少のうえ、これらに関する記録もなく、出土地点の確認に至らなかったものである。既知遺跡以外にも、意外な場所にさらに多くの、おそらくは小規模な遺跡が眠っていることを示唆する資料があったことを付記しておきたい。

## 2. 松川上流域の遺跡群

北ノ久保遺跡が所在する松川上流域の遺跡について、湯倉洞窟の最近の発掘や、村内遺跡詳細分布調査の結果をもとに、「牧の民俗」にならって時期別に分類し述べてみようと思う（第

第1表 牧地区遺跡の時代別分類  
(遺跡番号は第2図と符合)

時代・時期 遺跡	先 土 器	繩 文				弥 生				古 墳				奈 良	平 安	中 世	近 世	
		草 創 期	早 期	前 期	中 期	後 期	魏 期	不 明	中 期	後 期	不 明	前 期	中 期	後 期				
41 北ノ久保					○					○							○	
66 旧牧分校ブル											○	○						
42 牧			○	○	○					○					○	○	○	
43 潤 内								○								○		
44 屋 知		○	○	○	○	○	○									○		
45-1 福井原1							○											
45-2 福井原2	○			○	○											○		
46 上科ノ木					○													
47 棚山洞窟																○		
48 湯倉洞窟	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
65 福井城址																○		

1表)。遺跡の立地・特徴については同書で考察しているので、ここでは松川上流域に展開する遺跡群の動向をみながら、福井原所在の遺跡も含めて、牧地区の遺跡の変遷を追ってみたい。

現在、牧地区における最古の遺跡は、先土器時代と思われるノッチド・スクレーパーを出土した「福井原2遺跡」であるが、表面採集資料のため、遺跡の外容は明らかではない。この時

代の遺跡は八幡添遺跡、荒井原遺跡、紫遺跡が知られているが、いずれも1・2点の石器が採集されているにすぎない。須坂・小布施地方全般にわたって同じような状況であり、この時代の様相は詳らかではない。

次に、縄文時代でも古い時期の遺跡としては「湯倉洞窟」があげられる。現在、最下層に草創期の土器群の良好な包含層が存在することがわかっている。近い将来において洞窟での生活のありさまが明らかにされるであろう。縄文早期の包含層からは、新しい押型文土器の時期に属する熟年女性の抱石葬人骨がほぼ完全な形で検出されている。また、条痕文土器群もまとめて出土している。この湯倉洞窟を山岳地帯の遺跡とすれば、平野部かそれに近い場所にある里の遺跡として、「屋知遺跡」があげられ、ここからは押型文・条痕文土器がまとめて出土している。屋知遺跡は湯倉洞窟とほぼ併行する時代にあたる。押型文土器は荒井原遺跡、坪井遺跡からも出土しており、この時期から里でも人々の生活の痕跡がたどれるようになる。

縄文前期では、「福井原遺跡」の黒浜式、「屋知遺跡」の関山式と南大原式、「牧遺跡」の機維土器の出土が知られている。牧地区以外では、長峯遺跡の有尾式、小布毛遺跡の神の木式が知られ、前期前半の時期に一時的ながら遺跡が多少増加するようである。前期後半から中期前半までは、荒井原遺跡の上原式・下島式・中期初頭型式が、宮前遺跡、坪井遺跡、清淨場遺跡で中期初頭前後の資料がまとまっているが認められる。八幡添遺跡では発掘により中期の前葉と中葉土器が多少まとめて出土したが、生活跡は明らかでなかった。今回の調査で、「北ノ久保遺跡」から五領ヶ台式土器1点が検出されたが、一連の遺跡群の動向の中で把握されよう。しかし、中期の後葉になると、遺跡数は爆発的に増加し、加曾利EⅢ式期にピークをむかえ、その後は徐々に減少していく。後期の中葉にあたる加曾利BⅠ式期で断絶する場合が多い。これは北信地方に普遍的にみられる傾向であり、荒井原遺跡、坪井遺跡はその典型的な例である。現在、村内で時期のわかる縄文時代遺跡は18遺跡あり、このうち、加曾利E式および併行土器が出土しているのは13遺跡で、全体の72%をしめている。また、この時期の遺跡の規模は大小2種に分化する傾向がみられそうである。荒井原遺跡、八幡添遺跡、須坂市橋場遺跡は八木沢川右岸に立地する大規模遺跡であり、拠点的集落といえるであろう。八幡添遺跡の調査では加曾利EⅢ・Ⅳ式期の集落の様相が明らかになったが、輝石安山岩の平石を用いた敷石住居が一般的にみられること、加曾利E式系を主体に、唐草文系、圧痕降帶文と仮称される土着土器が伴うこと、打製石斧が大量に出土することなどがこの地方の縄文中期末葉遺跡の特徴といえよう。牧地区でも中期後葉には遺跡が多いが、「牧遺跡」の子安神社周辺はそのような遺跡の1つなのであろう。「上科ノ木遺跡」は加曾利EⅢ式を出土し、「屋知遺跡」・「福井原2遺跡」にも加曾利E式が認められる。

この後、縄文後期後半から晩期については、村内を見わたしてもわずかに「屋知遺跡」で晩期土器が見られるのみとなる。須坂・小布施地方でも各々1・2遺跡を数えるにすぎない。一方、「湯倉洞窟」に目を転ずると、中期の資料はきわめて少なく、後期前半と晩期後半に一時



第2図 北ノ久保遺跡付近の道路分布図

第2表 北ノ久保遺跡付近の遺跡分布地名表 (番号は第2図と符合)

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	備考 (所蔵者)
12	藤沢遺跡 藤沢焼窯跡	奥山田・藤沢	河岸段丘	(繩) 加曾利E式、打石斧 (近) 登窯1、工房址 磁器、サヤ、トチ、レンガ	昭55年発掘 村教委
13	神右衛門窯跡	奥山田・宮村	崖 雄	(近) 登窯 陶器、サヤ、ツク、棚板、レンガ	松本孝夫
15	中平遺跡	奥山田・中平	河岸段丘	(平) 土師器	村教委
16	長峯遺跡	奥山田・長峯	河岸段丘 報音堂	(繩) 有尾式、石鎌 (弥) 後期土器 (古) 穫穴住居1 鬼高式	村教委
17.	平林遺跡	奥山田・平林	河岸段丘	(平) 土師器	村教委
41	北ノ久保遺跡	牧・北ノ久保、河岸段丘 頓原		(繩) 打石斧、凹石、石皿 (弥) 箱清水式	村教委 昭60年発掘
42	牧遺跡	牧・下平、久	河岸段丘 灌下、稻荷	(繩) 加曾利E式、石鎌、打石斧、 磨石斧、磨石 (弥) 土器 (平) 土師器、須恵器	村教委
45	福井原遺跡				
45-1	福井原1遺跡	牧・福井原、 藤沢、頓原	扇状地	(繩) 石鎌	
45-2	福井原2遺跡	牧・福井原	扇状地	(先) ノッチド・スクレーパー (繩) 黒浜式、加曾利E式、石 、 石錐、打石斧、磨石 (中) 内耳土器	村教委

的に盛期をむかえたようである。

弥生時代になると、「湯倉洞窟」では中・後期とも資料が多くなるが、里では稀薄である。弥生後期でも新しい段階から古墳時代前期の遺物は「旧牧分校ブル地点」、荒井原遺跡、八幡添遺跡、梨の木遺跡で見られ、その前後は連続しないようである。しかし、小布施地方では弥生中・後期を通じ、安定して遺跡が存在し、古墳時代前期に至る。須坂地方では古式土師器の存在がいまひとつはっきりしないが、小布施地方とほぼ同じあゆみがたどれそうである。したがって、松川上流域でも弥生時代から古墳時代への過渡期の遺跡が存在することは、下流域と共に通したありかたといえるが、そのあらわれ方には下流域と異なった動きがみられるかもしれない。

古墳時代中・後期には、長峯遺跡で鬼高式期の竪穴住居1軒が検出された他、大宮南遺跡が知られるのみで、奈良時代とされる遺跡は皆無となる。後期古墳と思われる積石塚が8基確認されていることからすれば、該期の集落遺跡が少ないので奇妙である。これは表面採集による

土器の小破片では時期が識別しにくいということにもより、今後検出される可能性は大きい。牧地区でもそれと指摘できる資料がないが、「湯倉洞窟」では古墳時代中・後期の遺物は多量である。しかし、奈良・平安時代になると漸減する。

奈良時代の遺跡は現在のところ見出せないが、平安時代の遺跡は23か所を数える。この中にには時期決定に疑問の余地を残すものも含まれる。若干減少する可能性を考慮しても、各時代を通じて最高の遺跡数を示すものと思われる。「牧遺跡」の一部が該期の遺跡であることは前項で述べたが、松川の対岸にある平林遺跡はきわめて良好な資料を出土している。

中世とされる遺跡のうち、10か所の城館跡以外の遺跡は、内耳土器を出土したことから時期決定されたもので、全村にわたって散在している。このうち、樹形城跡の東麓に位置する中山遺跡群の千石遺跡はもっとも良好な遺跡と思われ、中世村落跡の存在も想定されるが、すでに破壊されてしまったのが惜しまれる。牧地区には「福井城跡」があり、「福井原2遺跡」では内耳土器、「牧遺跡」の久松下地跡では天目茶碗が採集されている。一方、「湯倉洞窟」では内耳土器が多数出土している。また、「棚山洞窟」では内耳土器1個体分が出土し、湯倉洞窟とも関連した通過性の遺跡と考えられている。

近世の遺跡としては、湯倉洞窟のほか、松川の対岸の「藤沢窯跡」と沖右衛門窯跡がある。前者は幕末頃の磁器専用登窯、後者はその窯道具やレンガを焼いた窯跡である。

以上、松川上流域の遺跡群の変遷を概観してみたが、牧地区の遺跡もそれらの動向と一体となった変遷を示していることがうかがえた。それらの変遷の中で、今回調査された北ノ久保遺跡や、再発見された旧牧分校ブル地点の弥生時代から古墳時代への過渡期の資料が物語るように、およそ前期古墳の発生とは無縁と思われるような山深い牧の地にも、全国的規模で土器が移動するという古墳出現期独特の事象がみられるという点は、むしろ注目に値しよう。

次に、牧地区的遺跡と湯倉洞窟の関連に注目してみよう。縄文早期においては屋知遺跡との併行関係が認められそうであるが、牧地区に遺跡の多い中期後半は湯倉洞窟では断絶期になる。それ以後の時代についてはあまり関連が認められない。むしろ、湯倉洞窟に遺物が残される弥生・古墳・奈良時代は、牧地区では弥生末期から古墳時代初頭の限られた時期を除き、遺跡の空白期といった觀を呈すようである。もちろん、同じ土器型式の存在が、異なる遺跡間の交流を物語る確実な根拠とはならないが、両者の併行関係を示すことから、交流が行われた可能性を見出すことは許されよう。このように考えてみると、山にある湯倉洞窟を拠点とした人々は、もっとも近い里の1つである牧に住む人々とは、平安時代以前ぐらいまでは、案外没交渉であったといえるかもしれない。このことは、「湯倉洞窟Ⅰ」報告書で述べている、平野部から山岳部への垂直的行動がみられないという指摘と同義である。

### 3. 牧集落の発生と耕地開発

中世以前の牧地区的遺跡は、弥生末から古墳時代初頭の限られた時期を除き、弥生・古墳・奈良時代は空白期となる。これを逆の面からみると、縄文・平安時代には人々がこの地域に住

める要素があったということになる。縄文・平安の複合遺跡と考えられる牧・源内・屋知遺跡の共通点をみると、牧地区唯一の中性河川である柞沢川に面した台地上に位置することがあげられよう。

この縄文遺跡の後を引きついだ平安時代の人々の生活はどうであろうか。例えば千曲川の氾濫原にのぞむ須坂地方の平安時代の遺跡群のような水田耕作は想定できない。現在の地形図を見ても、牧地区的平安時代の遺跡に間連すると思われる水田は多くない。また、後でみるとおり、寛永7(1630)年の検地帳をみても、畠の耕作面積が多く、そのことを推測できる。

奈良・平安時代における中央と地方との関係をみると、信濃国の貢物として料布・斗賊・硫黄・蛙・猪・鹿・熊・鷦鷯などが送られている。藤原京跡で発掘された木簡に、「高井郡大黄十五斤」と記されたものもみえ、信濃国の貢物に山・川の産物が多かつたことがうかがえる。また、山野を利用した牧についても、「延喜式」にみられる信濃国関係16枚のうち、「高位牧」が高山村にあったと考えられる。この高位牧が高山村のどの地域にあったかは確定できないが、当時、信濃国には私牧も多くあり、中世の信濃武士団の発生の基盤となったといわれている。このようにみてくると、牧地区的平安時代の人々の生活の根拠は山野にあったと考えられる。ただ、稻作が全くなかったということではない。一定面積内の山野からの収穫と稻作からの収穫を比較した場合、稻作の方が圧倒的に収穫量が高かったであろうし、その生産基盤の開発には不斷の努力がなされてきたはずである。黒部地区に所在する黒部遺跡は、高山村では有数の平安時代遺跡と考えられているが、湧水を中心とした用水にたる水稻耕作が行われており、水田開発の古きが想像できる例である。

中世の牧地区的遺跡には福井城がある。南北朝時代、宮方の香坂氏がたてこもった牧城がこれにあたるとの説がある。この説の是非はともかく、福井城は居館跡とされるが、そこに居館跡が設定された理由が、中世の牧地区的開発について1つの想定を与えてくれる。福井城の位置は、たびたび述べてきた牧地区唯一の中性河川柞沢川に面した台地に築かれている。その一段下は、福井原では水田耕作が可能となっている地域である。この水田耕作地を領主直営田とし、さらには柞沢川上流をおさえることにより、牧地区的用水管理権を掌握していくたどりみることができないであろうか。その意味では、牧地区的開発は福井城の存在なしには考えられないであろう。

さて、今回の発掘調査区である北ノ久保及び頼原地籍は、現在牧地区最大の水田地帯といえる。この地籍に近く、旧牧分校ブル地点から平安時代の内面黑色坏等が出土しており、崖には湧水がみられるので、部分的な開発は行われたが小規模なものであったと思われる。この地域は水持が悪く、用水路の設置が必要であったと思われる。この地域は「柄久保堰」・「新堰」・「幸之助堰」の用水によってうるおされており、「堰」の名称が近世的用語であること、また、「新田」とよばれている個所があること等を考えあわせると、近世を中心に開発してきたと考えられよう。

それでは牧地区における近世の耕地開発はどうであったのか。以下、山岸善一氏の「牧村の耕地開発」を引用して掲載しておきたい。

明治5(1872)年4月のこと、長野県庁からの要請で、高井郡牧村名主清太夫から牧村の検地帳が県庁役所へ提出された。提出された検地帳は次の11冊である。

寛永7(1630)年	牧村検地帳	寛永14(1637)年	牧村新田検地帳
寛文10(1670)年	牧村新田検地帳	元禄7(1694)年	牧村新田検地帳
明和5(1768)年	牧村新田検地帳	明和8(1771)年	牧村新田検地帳 2冊
安永8(1779)年	牧村新田検地帳 3冊	天保9(1838)年	牧村新田検地帳

この11冊の検地帳は牧区に保管されて現存している。この中、寛永7(1630)年の検地帳は小笠原壱岐守忠知の検地帳で、「信州高井郡牧村御検地帳」と称している牧区の貴重な根本史料である。

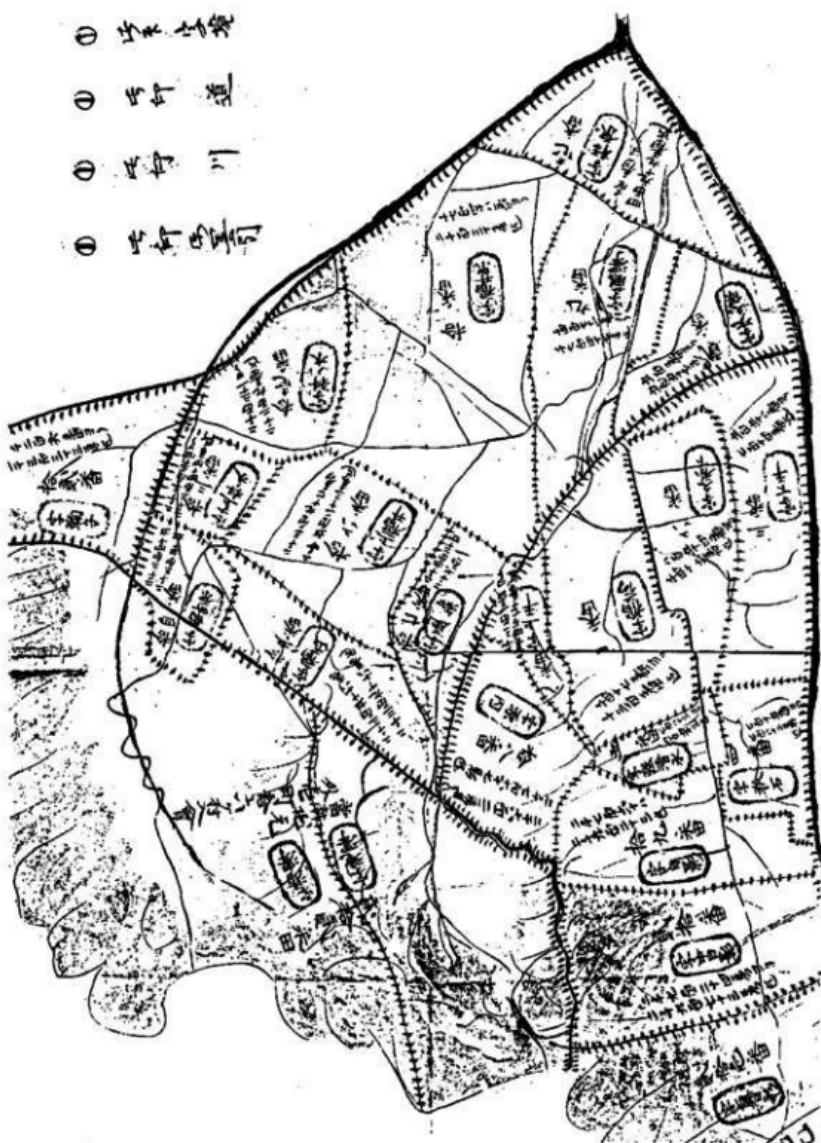
牧区に牧村の伝承をつづった「牧村根元記」という覚え書が保存されている。この覚え書の中に森右近の検地の一端がつづってある。これによると、「森右近様御知行所になり、慶長2年丁酉(1597)8月新御検地、村高350石余仰せ付けられ、御高免、殊に御役はきびしくなかなかもって、百姓相続難儀におよび、日増に百姓困窮仕り、よんどころなく越後國や甲州・上州辺へ、あるいは縁家好身ゆかりある方へ忍耐れ、村をあげて逃散し、村はいつしか鹿の臥す荒野となる。しかしながら故郷をおもうやるせなさに、去年は3人、今年は2人とだんだん立帰えり、ひそかに元の地を切開らき、十二三人の者寛永7年2月、右のおもむきを小笠原壱岐守様へ書付けをもって歎願におよんだ」と書きつづっている。もとより「牧村根元記」は写しであり、覚え書きでもあるが、森検地のいわゆる「右近竿」の歴しかった事実を物語っている貴重な資料である。

慶長19(1614)年より領主となった小笠原壱岐守忠知に対し、牧村の百姓13名が森右近の棟

第3表 牧村耕地面積および石高の移動(検地帳による)

年代	田 方(畝)	畠 方(畝)	田 畠 計(畝)	石 高(石)
寛永7	661.27	1011.05	1673.02	174,1326
寛永14新検	6.04	166.03	172.08	13,9620
寛文10"	74.26	1018.16	1093.12	75,8090
元禄6"	4.16	289.02	293.18	17,9750
明和5"	-	27.06	27.06	1,6320
明和8"	-	141.03	141.03	7,0620
明和8"	7.27	927.12	935.09	46,7040
安永8"	23.06	429.21	452.27	29,7330
安永8"	-	307.06	307.06	9,7300
安永8"	-	3618.18	3618.18	145,3820
天保9"	151.00		151.00	13,5900
計	929.16	7936.02	8865.18	535,7116

第3圖 牧區地圖 (作成年不詳)



烈な検地の実状を訴え、新検村を歎願したところ、お取り上げになり、新検地による牧村検地帳が作製され、寛永7(1630)年2月に交付されたのである。この検地帳が前述した「信州高井郡牧村御検地帳」なのである。この検地帳による牧村の村高は174石1斗3升2合6勺(約3万1343.76ℓ)であり、耕地面積は16町7反3畝2歩(約16万5917.43m<sup>2</sup>)である。

牧区に現存する他の10冊の検地帳はいずれも新田検地帳である。これらの10冊の検地帳によつて、牧村の石高および耕地面積の移動をみると、天保9(1838)年の新田検地までの約200年間に、石高の増は361石5斗7升9合(約6万5084.22ℓ)、耕地面積の増は71町9反2畝16歩(約71石3256.53m<sup>2</sup>)で、その増加反別は実に4.29倍という高率である。

次の第2表は牧村検地帳に記載されている耕地(田・畠・やしき)の地名を各種の検地帳より抽出した地名一覧表である。地名「とん原」は寛永7年の検地帳に、そして、それ以後の寛永14年、寛文10年、安永8年、天保9年の各新田検地帳に、また、「北ノ久保」の地名は、寛永14年、寛文10年の各新田検地帳に明記されている。したがって、「とん原」は寛永以後漸次開発された地域であり、「北ノ久保」は寛永14年、寛文10年に開発された地域であることが明確である。

第4表 高井郡牧村検地帳に記載されている地名(検地帳より抽出)

検地帳	検地帳に記載されている地名
寛永7	やち田・とん原・藤沢・下平・くね下・大くぼ・いなり・いやしき・おくらやしき・上たら原・ふくい・まりこ・火沢・ふくい原
寛永14新検	下平・平くり・むかいの平・ふくい原・山崎・とん原・北ノ久保・八丁・藤沢
寛文10〃	福井原・しなの木・どん原・ほり久保・川久保・北ノ久保・はしば・石原田・藤沢やしき・宮坂・上たら原・平くり・むかいの平・下平・こわ清水・きつね石・いなり・こんげん堂
明和5〃	福井原
明和8〃	福井原・福井原新田・上信ノ木・北やち・下信ノ木・道南くぼ・まり子
安永8〃	種沢・どん原・どっ原・山崎・石原田・こわ清水・いなり・こんげん堂・くね下・上だら・向ノ平・福井原・川ノ久保
天保9〃	とん原・

## 第3章 遺跡の状態

### I 試掘確認調査区域

牧地区の地形を概観すると、大きく二段の地形面に分けることができる。上段面は柞沢川の押出しによる扇状地形で、現在の牧集落が発達している所である。下段面は松川が浸食した平垣地で、左岸一帯に段丘状の地形がひろがっている。この段丘面は、柞沢川が松川に合流する地点から、西方へ樋沢川が松川に合流する地点まで、緩やかな傾斜をなして続き、主として水田地帯になっている。段丘面を形成した松川は、山田温泉から深いV字谷を刻み、下流域においてもかなり険しい谷を形成して、所々に狭い河岸段丘をつくっている。

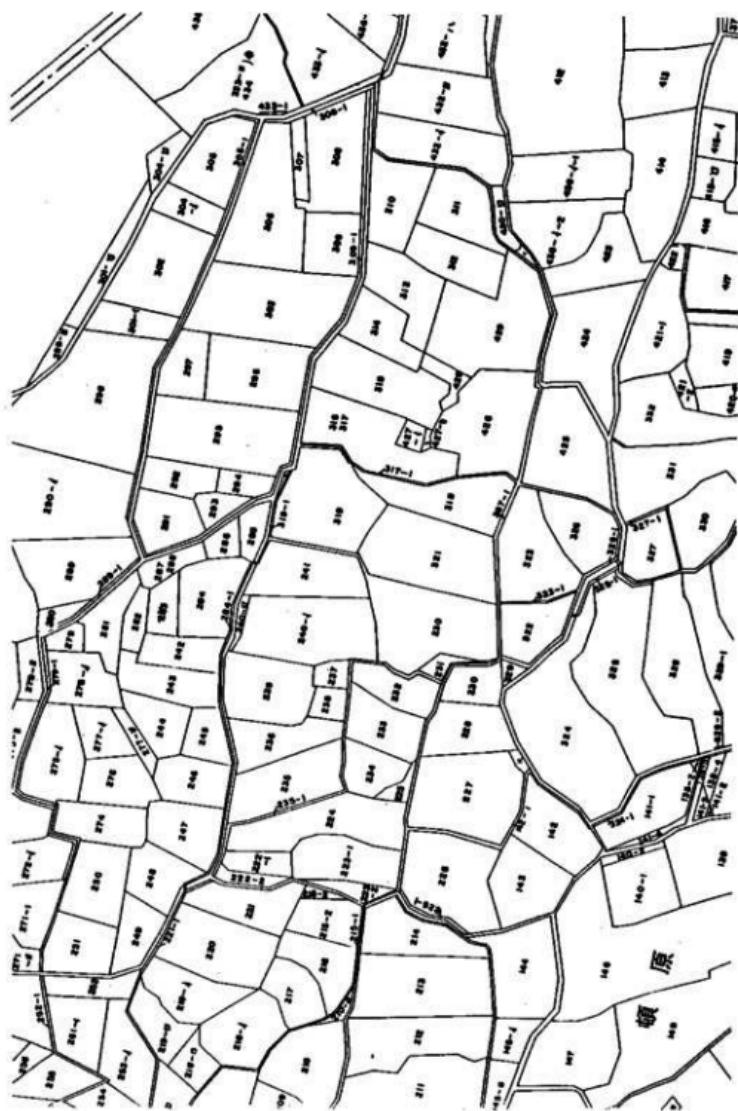
北ノ久保遺跡はこの下段面の限られた部分に立地しているが、地籍は頓原に属しており、字名を冠して遺跡名とするならば、「頓原遺跡」と称すべきであろう。しかし、今まで北ノ久保遺跡として周知され、遺跡の範囲も地形的にみて北ノ久保と頓原の二つの地籍にまたがる可能性が十分考えられることから、遺跡名は從来どおりそのまま使用することになった。村内遺跡詳細分布図でもその範囲はほぼ北ノ久保と頓原にまたがることを明らかにしている。その根拠は、「昭和20年4月1日、頓原地域で学童の勤労奉仕麦ふみ作業時に、麦畑で黒曜石破片1個と珪石破片2個を採取する」。という山岸善一氏の御教示にもとづくことと、村内遺跡詳細分布調査の折に、僅かではあるが資料を表面採集していることによるものである。ただし、分布調査の折は、水田が多く表面採集が充分でなかったため、内容的には今回の試掘確認調査をまたなければならないといった。

試掘確認調査は、小型のバックホーを使って、水田1区画毎に平均1試掘坑をあけ、遺物の出土状況を観察するものであった。実施した結果、遺物の出土地点は第4図の地番でひろうと、⑩196—イ（磁器）、⑪197（陶器）、⑫199（陶器）、⑬200（土師器・磁器）、⑭202（縄文土器）、⑮204—イ（土師質土器・磁器）、⑯208—イ（弥生土器・磁器）、⑰210（磁器）、⑱211（磁器）、⑲212（陶器）、⑳215—2（黒曜石）、㉑216（土師器）、㉒217（土師器）、㉓220（水晶・磁器）、㉔236（檜）、㉕296（磁器）、㉖305（磁器）、㉗319（磁器）、となる（○番号は調査坑番号）。

遺物は陶磁器を中心で、いずれも小破片にとどまり、遺構等の形跡が認められなかったため発掘調査の必要性はないものと判断された。

一方、土層状態をみると、全体に松川の堆積による礫を含んだ黄砂土が地表面をなし、その上に火山灰土の黒色土が堆積している。黒色土は約10cm位と浅く、乏水性の土壤構造をなしている。遺物はこの黒色土から検出されているが、遺物が検出された地点の黒色土は約50cm以上と厚くなり、表面の地形は窪地状になっている。これは明らかに段丘面上の河流の跡を示すも

第4図 稲原地籍図

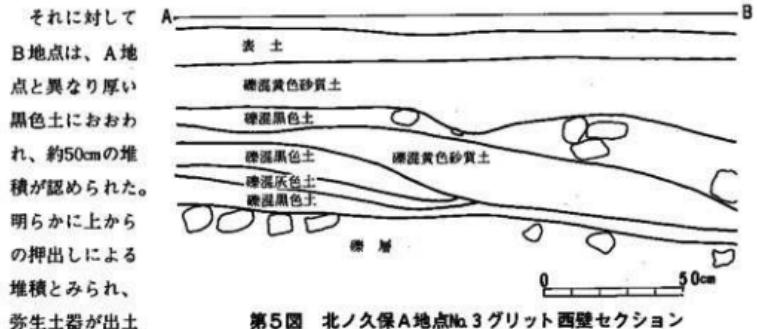


ので、ひときわ厚い黒色土の堆積は河流の押し出しによるものと思われる。したがって、河流跡に遺物が多く検出されたことは、少なくとも黒色土とともに上からの流れ込みを想定することができる。こうしてみると、現地形面や遺物の出土状況から、この頓原の段丘面上には二つの流路が存在していたことがわかる。また、段丘崖寄りでは今でも湧れがあり、湿地を残している。

## II 北ノ久保遺跡A・B地点

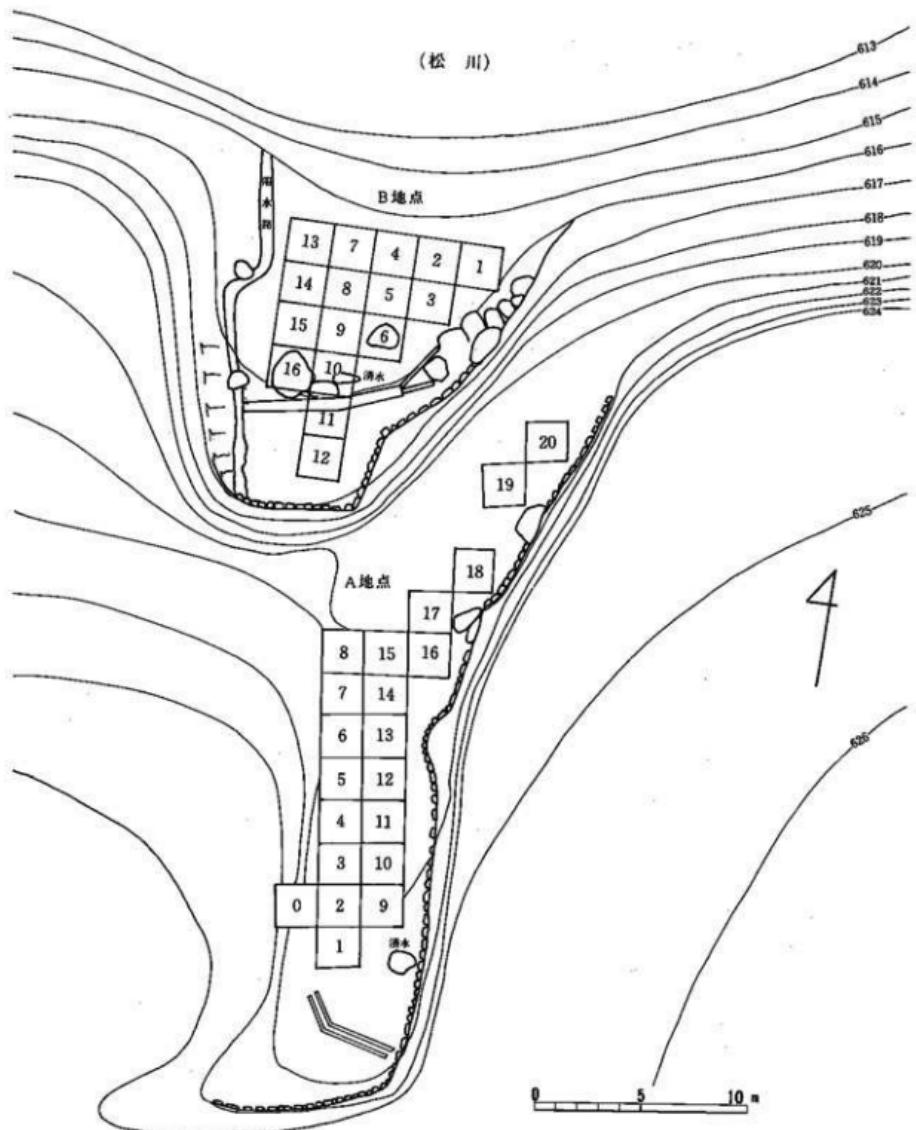
この地点は弥生後期の箱清水式土器が単独出土した所で、試掘確認調査の対象からはずし、直接に発掘調査のためのグリットを設定した。ここは松川の浸食谷に接し、段丘面が田切り状に刻まれて、狭い沢谷状を呈している。河流の浸食によるもので、現在でも多量の地下水となって伏流している。この沢谷の地表面は農耕地で、土砂の流失を防ぐために人為的に石垣が築かれ、段状になっている。調査に際しては、この上段をA地点、下段をB地点としたが、A・B地点の間には約2m以上の段差がある。箱清水式土器は下段のB地点で発見されたものである。遺跡の立地としては通常の状態ではありえないが、弥生土器の出土が明確である限り、当然のことながら発掘調査による究明が必要とされた。

そこで、発掘調査に先立って、2m四方のグリットをA地点ではNo.0～No.20、B地点ではNo.1～No.16を設定した。発掘はA地点から着手したが、土層状態は予想に反して良好ではなかった。遺物包含層である黒色土はきわめて浅く、河流による流失を物語っていた。また、第5図のように、礫含みの黄砂土中に黒色土が混在しているグリットも一部分あり、かなり耕作による擾乱の著しいことが認められた。



第5図 北ノ久保A地点No.3グリット西壁セクション

した地点はグリットNo.10で、地下水が湧出して湿地になっている所である。土器そのものも上から流されてきたものと考えられるが、事実この黒色土の下は礫石が重なり、地下水が礫石の間をぬって伏流している。

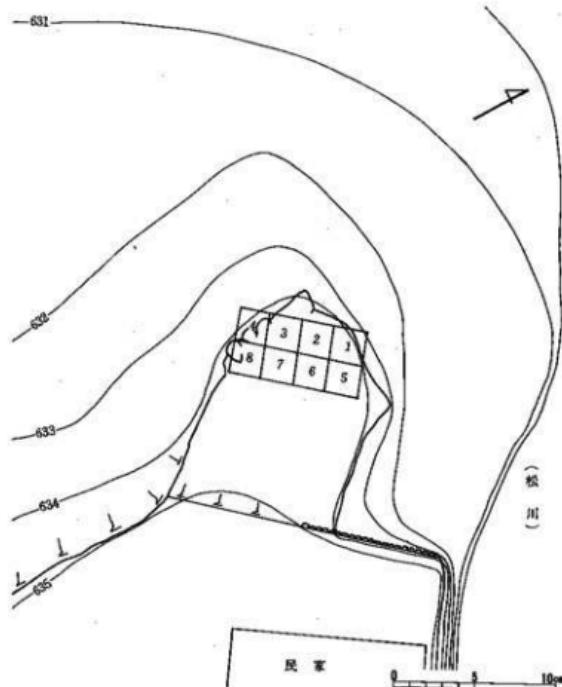


第6図 北ノ久保A・B地点全体測量図

### III 北ノ久保遺跡C地点

北ノ久保C地点はA・B地点から約100m 東方の、松川に接して立地するが、ここは段丘面の乾燥した所で、浸食された河流面からみると、丘陵状の小高い地形を呈している。ここから大型の打製石斧・剥片石器・凹石が各1個発見され、現在も大切に保管されている。いずれも縄文時代の遺物に相違ないが、その出土状態や相当する時期、あるいは遺跡の内容については全く不明であった。

今回のは場整備事業で、遺跡とされる範囲の一部分で須加尾影治氏宅西隣りの畑地が削平されたため、№1～№8のグリットを設定し発掘を行った。その結果、遺跡の状態はきわめて悪く、ごみすて場として穴が掘られたりして、擾乱が著しかった。土層の状態も遺物包含層の黒色土はとり去られてほとんどなく、黄色土が礫石とともに地山面をなしていた。出土遺物も縄文土器片と土師器片が各1片検出されたにすぎなかつたが、1片の縄文土器片により時期決定の手がかりが得られたことは大きな成果であったといえよう。



第7図 北ノ久保C地点全体測量図

## 第4章 遺物

### I. 出土遺物

今回の調査により出土した遺物はきわめて少量であった。内訳けは繩文土器1点、近世・近代の陶磁器19点で、これらは全点を図示した。いずれも小破片であり、図化にあたって、挿図には口径または底径の推定できた破片、口縁部破片、採拓可能な破片を実測及び拓本図として掲載した。また、写真図版には、図化した遺物の他に、図化の不可能な破片も掲載した。なお、この他に、磨滅の著しい土師器と土師質土器の小破片10点足らずと、黒曜石片1点も出土している。

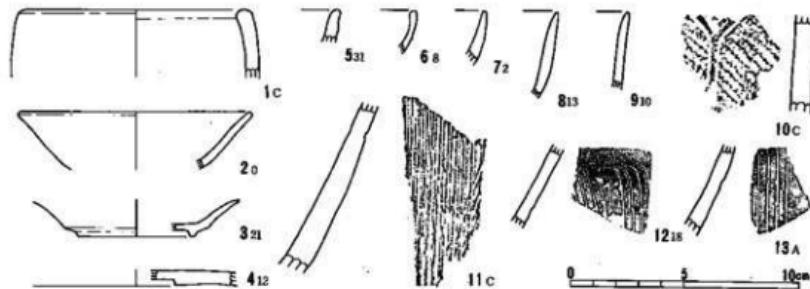
#### 繩文土器（第8図10・PL 8-10）

やや粗い胎土ながら、赤褐色を呈す焼成のよい土器である。器面が軟かいうちに単節RLの繩文を施し、半脱竹管状工具でY字状文を刻んでいる。五領ヶ台式土器の中頃に位置づけられる口縁文様帶直下の破片と思われる。

#### 陶磁器（第8図1～9・11～13、PL 8-1～9・11～20）

出土した陶磁器はいずれも小破片のため、器形のわかるものが少ないが、江戸時代から明治・大正時代の所産と思われる。詳細な時期や産地の推定は困難ではあるが、およそ時代を追って説明しておきたい。

PL 8-15は鉄釉陶器で、江戸時代中・後期の産と思われる。第8図9は江戸時代後期の伊万里焼そば猪口である。県内には多くみられる。第8図16は幕末の色絵青磁である。第8図4は磁器で、平鉢の底部である。藤沢焼の可能性がある。第8図11～13、PL 8-11～13は掛鉢である。第8図12・13は焼締のみ、第8図11・PL 8-11は鉄釉がかかる。これらは瀬戸美濃を



第8図 出 土 遺 物

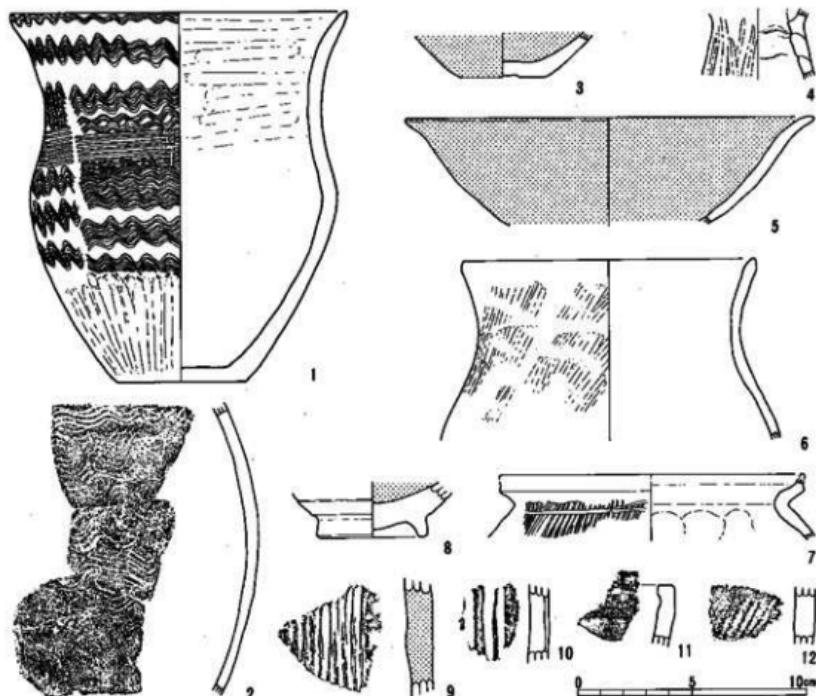
まねて在地で生産されたと思われるものであるが、土に不純物が多く、第8図11・12にはへたりがみられる。第8図1は土師器系土器である。いずれも江戸時代の產と思われる。第8図2・3・8は明治時代、第8図6・7は明治から大正時代にかけての瀬戸美濃製品である。その他は時期決定が困難であるが、釉は第8図5、PL 8-17・18が灰釉、PL-19が飴釉、PL 8-20が鉄釉である。

## II 関連遺跡の既出遺物

ここでは今回の調査に深い関連をもつと思われる牧地区所在の牧遺跡と旧牧分校ブル地点の既出遺物、それに今までふれてきた北ノ久保遺跡の既出遺物について紹介しておきたい。

### 1. 北ノ久保遺跡（第9図1・第10図4～6）

弥生土器（第9図1） 箱清水式の甕である。小形の部類で、単純な口縁形態を呈する善光寺平型に属す。ほぼ完形で、口径14.6cm、器高16.0cmを計り、口縁部に最大径をもつ。外面は



第9図 関連遺跡既出遺物(1)

(1北ノ久保、2~7旧牧分校ブル、8~12枚)

櫛描波状文を施した後、頸部に3連止めの簾状文を施す。胴下部はタテヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキ。櫛描文が整わないことから、箱清水式でも新しい段階に位置づけられよう。

打製石斧（第10図4） 石質は変質泥岩。長さ20.3cmに達する大形品である。従来の分類では楔形に属す。素材は縦長剝片らしく、両側縁につぶれがみられる。刃部はほとんど調整されず、偏刃を呈する。

剥片石器（第10図6） 石質は変質泥岩。横長剝片の表面に二次的な剝離が施されている。

石皿（第10図5） 粗質な安山岩円礫の上面に深く大きなくぼみをもつ。内面は磨滅してなめらかである。下面も敲打が加えられ、わずかにくぼんでいる。小形石皿、あるいは一種の凹石であろうか。

以上の遺物のうち、弥生土器はB地点、石器類はC地点から出土している。

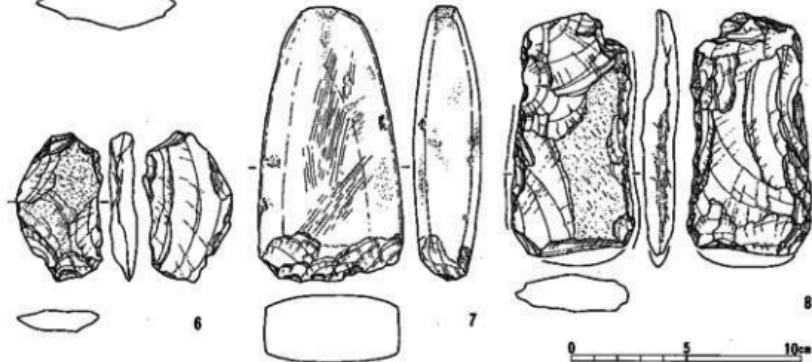
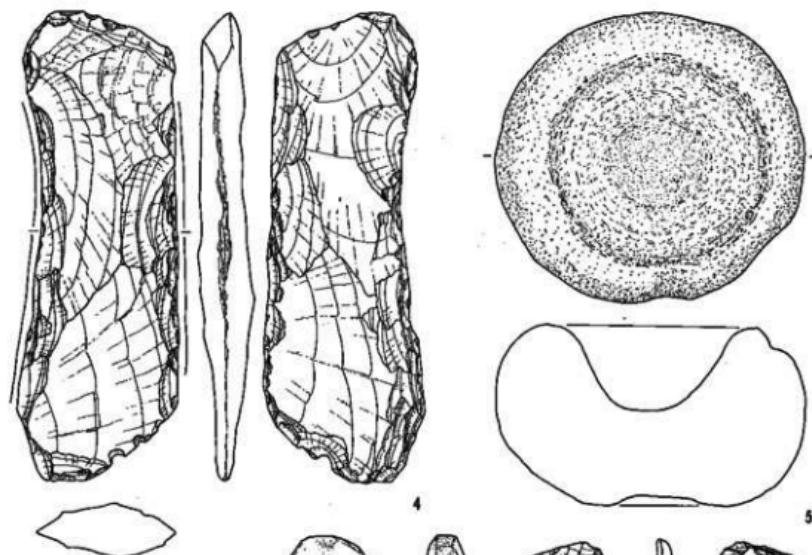
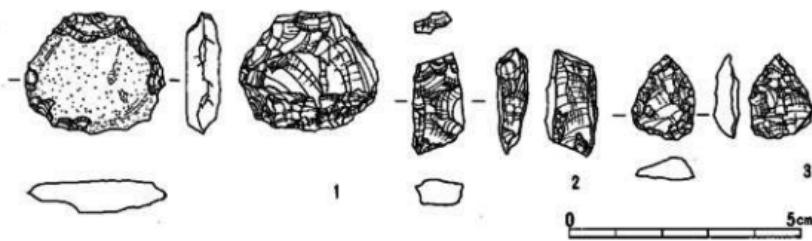
## 2. 旧牧分校プール地点（第9図2～7）

本報告のために高山村歴史民俗資料館の収蔵資料を点検したところ、新たに再発見したものである。したがって、遺跡地名表・分布図に新たに登載するもので、現在65遺跡が登録されているため、仮に66番を付した。図示した6点の土器がすべてで、いずれも「牧分校プール」の註記があるものの、採集の経緯等は全く不明である。

第9図2は箱清水式の甕で、胴部最大径の部分である。外面は櫛歯7～8本単位の櫛描波状文が施され、弥生後期でも新しい時期に位置づけられる。内面はヨコナデされている。同図3は鉢または碗である。胎土は比較的緻密で焼成もよい。内外面とも入念にヘラミガキされ、赤色塗彩されている。底面中央がくぼみ、いわゆるドーナツ状底部を呈す。同図5は高环の环部である。胎土・焼成とも比較的よい。内外面ともていねいにヨコヘラミガキされ、赤色塗彩される。口縁部は屈曲がなく、ゆるやかに外反する。やはり箱清水式でも新しい段階に位置づけられる。

同図6は小形の甕である。胎土は粗雑で器壁は薄い。胴部に最大径をもつ器形を呈す。外面は弱いナナメハケメの後、口縁部ヨコナデ、内面はヨコナデされる。在地の弥生後期の甕の器形を踏襲しているが、無文となっていることから古式土師器としてとらえられ、4世紀前半頃に位置づけられる。同図7はS字状口縁台付甕である。小形の部類である。胎土は粗雑で、在地で製作されたS字甕である。口縁部下段は内湾ぎみに開き、内面はわずかにくぼんで立ち上がる。口唇部は欠損している。外面はやや粗いタテハケメの後、頸部にヨコナデが1条施される。内面は頸部直下をユビオサエされる。4世紀後半頃に位置づけられる。同図4は高环の脚部上半分である。胎土・焼成は比較的よい。外面はタテヘラミガキ、内面はヨコナデされるが輪積み痕を明瞭に残す。7とともに東海系の古式土師器であろう。

以上6点の土器は、弥生後期後半から4世紀後半代という、かなり限られた時間内に位置づけられる。内容も、在地の弥生末期土器、その伝統を引く古式土師器、東海系古式土師器と多彩な構成をとっている。S字甕の検出は、松川流域では初めてであろう。弥生時代から古墳時



第10図 間連遺跡既出遺物(2) (4~6北之久保、1~3・7・8牧)

代への過渡期に多種の外来系土器の流入が著しいことはつとに指摘され、とりわけ東海系土器は目立った存在を示すが、このような山深い地域にも波及する背景には興味がもたれる。

また、遺跡は北ノ久保遺跡の上段にあたり、その南側は福井原遺跡が所在する大平山系の末端がせまって、かなりの傾斜地である。冬期の日照も悪く、水に恵まれていることを除けば、遺跡の立地条件は必ずしも良好とはいえない。村内遺跡詳細分布調査の際にも、周囲の畠地では遺物を採集していないので、おそらく小規模で短時期の遺跡として存在したのであろう。

### 3. 牧遺跡（第9図8～12・第10図1～3・7・8・第11図9～15）

牧遺跡の出土遺物は、記録ではかなり多数にのぼり、特に磨製石斧の多さが注目されていたようである。出土地点は稻荷、久捺下、下平にまたがり、稻荷の子安社を中心に多くの出土が知られている。前述の敷石住居跡も、記事の内容から推定するとこの辺であろう。今回図示した遺物も、この三つの地籍から出土したものであるが、確認できたものは意外に少なかった。ことに、土器は圓化に耐えるものがきわめて少く、記録に残る加曾利E式、弥生式は、保管資料の中に見当らなかつたのが惜しまれる。以下、遺物の概要について述べておきたい。

繩文土器（第9図10～12） 10は太い平行沈線が3条垂下する。11は無文の口縁部で、口唇の内面は肥厚する。12は単節L Rの繩文が施されている。10・11には「子安社」、12には「子安宮24・9・6」の註記がある。いずれも小破片で、明確な時期決定はむずかしいが、11の口縁の形態は堀之内式頃に認められると思われる。10もそのあたりに位置づけても支障はなかろう。

須恵器（第9図9） 豊の胴部である。外面は平行の深いタタキが施され、内面は凹凸がある。

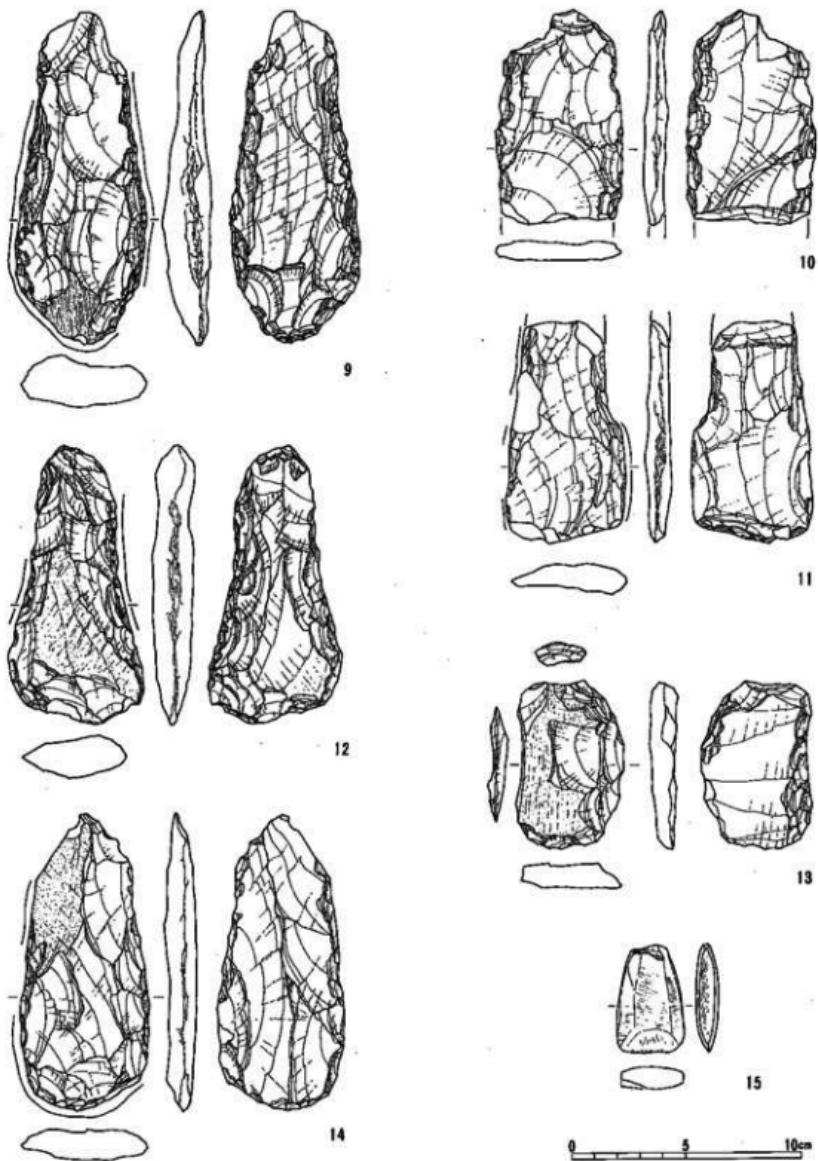
陶器（第9図8） 天目茶碗である。2次焼成のため胎土は赤味がかるが、粗雑なつくりである。瀬戸美濃をまねた近世陶磁窯の産と思われ、美濃大窯期に併行する。8・9は共に村内遺跡詳細分布調査で久捺下より表面採集した。

スクレーパー（第10図1） 材質はチャートで、厚身の剥片の裏面側を調整し、下端に刃部を作りだしている。円形を呈し、表面は自然面を残している。

ピエス・エスキュー（第10図2） 材質は黒曜石で、上下の対辺から向ってのびる剝離痕があり、一般的な特徴をもっている。横断面は長方形、縦断面は楔形を呈す。下端は尖り、上端は半剝離面となっており、つぶれはみられない。

石鏸（第10図3） 材質はチャートで、厚身の剥片の周縁に急角度の調整を加えている。円基三角鏸を意図したものが、素材の形状に左右されたためか、不整形になっている。

打製石斧（第10図8～14） 石質はいずれも変質泥岩である。13以外は横長剝片を素材とする点は共通している。従来の形態分類にしたがえば、8・10・13が短冊形、その他が楔形となる。8は表面に自然面を残している。右側縁は磨耗が顕著で、刃先を欠損する。「昭和17年5月3日朝子安神社境内にて」の註記がある。9は下半部が厚くなり、そりをもつ。刃部は円刃



第11図 関連遺跡既出遺物(3)

(9~15枚)

を呈し、磨耗が顕著で、表面にわずかに残る自然面は縦方向の擦痕が認められる。「昭和31年10月子安社、黒岩和博君」の註記がある。10は大きく平坦な剝離によって薄身に仕上げられている。刃部を欠損する。「玉枝・子安社」の註記がある。11も薄身で、側縁の磨耗が顕著である。12は厚身である。調整はていねいで、第1次剝離面は部分的に残る。偏刃を呈し、裏面刃部の右端は磨耗が顕著である。13は小形である。縦長剝片を素材として、裏面からの比較的急角度の剝離で調整している。14は表面に自然面を残す。頭部は薄く、尖る。あまり細かな調整は施されていない。円刃を呈し、刃先は磨耗している。

磨製石斧（第10図7・15）石質は蛇紋岩で、形態は定角式に属す。7は対象物による裏面からの加撃で刃部を欠損している。横斧として使用したのであろうか。「昭和16年7月15日淹澤次司君作沢橋万座線口（上平か）」の註記がある。上平出土とすれば源内遺跡の遺物とすべきであろうが、はっきりしない。15は小形品で、頭部と胸部の一部を欠損する。刃先は磨耗し、縦方向の短い擦痕が認められる。

以上の石器で、出土地籍は8～10が子安社、1～3・14・15が糸荷、11が久林下、12・13が下平、7が上平である。牧遺跡は古くから多くの遺物を出土することで知られていたようであるが、村内遺跡詳細分布調査により初めて範囲が明らかになった遺跡である。この調査では、前述の遺物の他に、繊維を含む縄文施文の土器もあり、縄文時代でも断続的に前・中・後期にわたるらしいことがわかった。また、近世の地元産と思われる陶器も検出され、従来知られていたよりもかなり長い時期にわたることが明らかになってきた。表面採集が可能だったのは久林下地籍の畠地で、平安時代土器の小破片が濃密に分布していた。また、今回図示した資料や従来の記録からは、子安神社を中心とした地籍から縄文時代遺物が多出することが知られていた。このことから、牧遺跡の範囲内でも、作沢川に近い黒湯山系の山麓台地は縄文時代、久林下地籍東半の松川上位段丘は平安時代の生活跡と、時代を異にした2つの部分から構成されることが、おぼろげながら判明してきた。後者についてさらに推測を重ねるならば、採集遺物がほとんど土師器で、須恵器がきわめて少なく、环類が含まれていないことから、平安時代でも後半期に主体がおかれる可能性が指摘できる。

## 第5章 まとめ

北ノ久保遺跡が一般に周知されるようになったのは、昭和24年にさかのぼる。そのきっかけになったのは、水田の側溝工事の際に、弥生後期の箱清水式變形土器が偶然発見されたことによる。そして、この土器は長い年月を経て、今日なお資料的価値を失っていないのは、発見当時から深い関わりをもたれてきた山岸善一氏の適切な註記によるところが大きい。それに加えて、今回の報文に特別寄稿してくださった同氏の手記にみられるように、この土器は遺跡の実

地講習会で八幡一郎氏の実見するところとなり、遺跡の名をさらに高める結果になった。

八幡一郎氏を招いての遺跡実地講習会は、弥生土器が発見された昭和24年に行われているが主催者の上高井郡郷土史研究同好会は贋写版刷りで、「山田・高井・日滝方面踏査参考」と題して資料を作成した。この中でも、「高井村の出土品」の項で、「福井原の大平に近い所から縄文式土器を出し、作沢川を越えた人家の庭先から磨製石斧を多く出している。もっとも古来牧の名物だ位出土したそうである。藤澤谷に下る底地の田の中から弥生式土器が出土しているのである。」と記している。このように北ノ久保遺跡の名はかなりはなばらしい名乗りをあげたと思われるが、遺跡の内容についてはやや不明確さを残すことになり、山岸氏によって一度復原された弥生土器も、その後の保管状態が悪化するうちに再び破片に戻り、いつしか出土地点もおぼろげになっていったようである。

しかしながら、今回の県営ほ場整備事業が施工されるにあたり、北ノ久保遺跡は忘れられることなく、関係者らにより保護措置が図られ、事前に発掘調査を実施して記録に残すことになった。発掘調査を依頼された北ノ久保遺跡発掘調査団は、調査の実施にあたって次の三つの目的を基本的な柱にすえた。

1. 完形の弥生土器が単独出土した地点は、直接には生活跡と結びつかない立地条件の下にあり、特異な遺跡として考えなければならない。いわれているように、本当に単独出土なのかどうか、また、狭い谷あいの湿地になぜ土器が残されたのか、等を明らかにする必要がある。
2. 北ノ久保遺跡からはこの他に打製石斧や凹石も出土しているが、弥生土器の出土地点と異なるようであり、その内容については弥生土器出土地点以上に詳らかではない。そのため、遺物の出土状態や遺構及び時期等の究明をする必要がある。
3. 松川左岸の段丘面には上記2地点の他に遺跡が点在している可能性があると思われる。試掘確認調査によってその存否を明らかにし、遺跡の範囲や内容を把握する必要がある。

以上の三つの目的については、発掘調査によってほぼ明らかにされたといってよい。詳細については本文で述べてきたとおりであるが、結果を要約すれば、まず、弥生土器は明らかに単独出土であり、埋納等の人為的な形跡は認められなかった。それではなぜここに残存していたかという点について推測すれば、地形的に上段に立地する牧分校プール地点や牧遺跡などから、遺物が押し流された結果と考えるのが妥当と思われる。また、縄文時代遺物である打製石斧や凹石の時期については、擾乱のため明確な把握はできなかったが、縄文中期初頭の土器片が出土しており、やはり打製石斧や凹石が多く出土する縄文中期頃に相当させて考えられる。さらに、松川左岸の遺跡確認については、まとまった遺物や遺構がなく、いわゆる遺物散布地として確認できたにとどまった。若干の土師器片や黒曜石等も、やはり上段からの押し出しとして考えられよう。この広大な頼原地籍が開発されるにいたったのは、弥生土器や土師器・須恵器の時代よりずっと新しく、17世紀の検地帳にその名をとどめる頃になってからと思われる。

権筆するにあたり、発掘調査に御協力いただいた関係者に心から感謝の意を表す次第である。

## 参考文献

(編著者50音順)

- 青木和明 1984 「箱清水式土器の編年予察」(『長野県考古学会誌』)
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」(『東京大学文学部考古学研究室紀要』4)
- 岩崎卓也 1984 「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学』III
- 小布施町史刊行会 1975 「小布施町史」
- 小布施町教育委員会 1977 「大道上遺跡」
- 上高井誌編纂会 1962 「上高井誌」歴史編
- 笹沢浩 1986 「箱清水式土器の文化圏と小地域」(『歴史手帖』14—2)
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料」第1巻上・下
- 須坂市教育委員会 1982 「横場遺跡」
- 須坂市史編纂委員会 1981 「須坂市史」
- 関孝一 1969 「長野県上高井郡高山村坪井遺跡の発掘調査」(『信濃』III 21—8)
- 関孝一 1984 「上高井郡高山村湯倉洞窟の調査概要」(『須高』18)
- 高崎市教育委員会 1981 「元島名将軍塚古墳」
- 高山村教育委員会 1979 「牧の民俗」
- 高山村教育委員会 1983 「小布毛遺跡」
- 高山村教育委員会 1984 「八幡添遺跡」
- 高山村教育委員会 1984 「湯倉洞窟Ⅰ」
- 高山村教育委員会 1984 「高山村遺跡詳細分布図」
- 高山村教育委員会 1985 「藤沢窯跡」
- 長野県史刊行会 1981 「長野県史」考古資料編遺跡地名表
- 花岡弘 1986 「土師器の成立と古墳時代」(『歴史手帖』14—2)
- 丸子町教育委員会 1985 「市の町・塩川条里的遺構遺跡」
- 綿田弘実 1983 「北信地方における绳文中期末葉より後期初頭の土着土器」(『須高』17)



1. 北ノ久保遺跡 A・B・C 地点 (南方を望む)



2. 北ノ久保遺跡 A・B・C 地点 (西方を望む)



1. 北ノ久保遺跡 A・B 地点



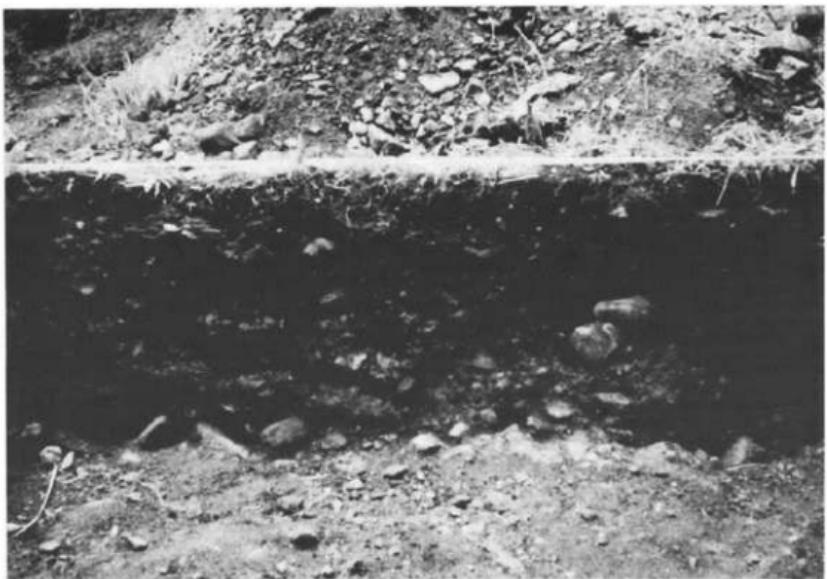
2. 北ノ久保遺跡 C 地点



1. 北ノ久保遺跡 A 地点



2. 北ノ久保遺跡 A 地点



1. 北ノ久保遺跡 A 地点 No 3 グリット土層状態



2. 北ノ久保遺跡 A 地点 溝水地



1. 北ノ久保遺跡 B 地点



2. 北ノ久保遺跡 B 地点 弥生土器出土地



1. 北ノ久保遺跡 B 地点



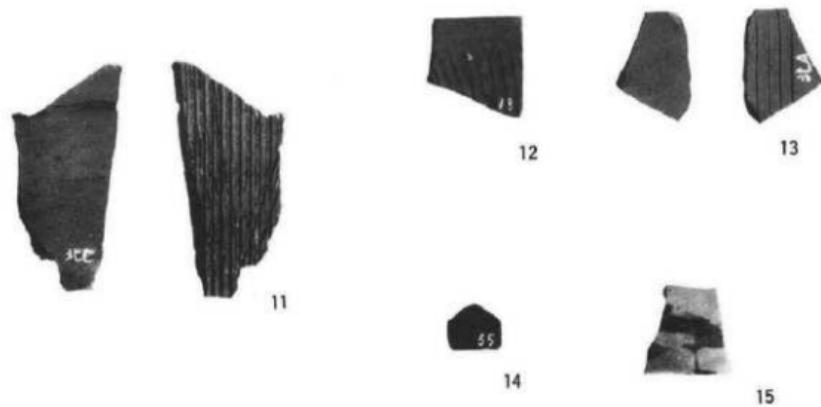
2. 北ノ久保遺跡 B 地点



1. 北ノ久保遺跡 C 地点



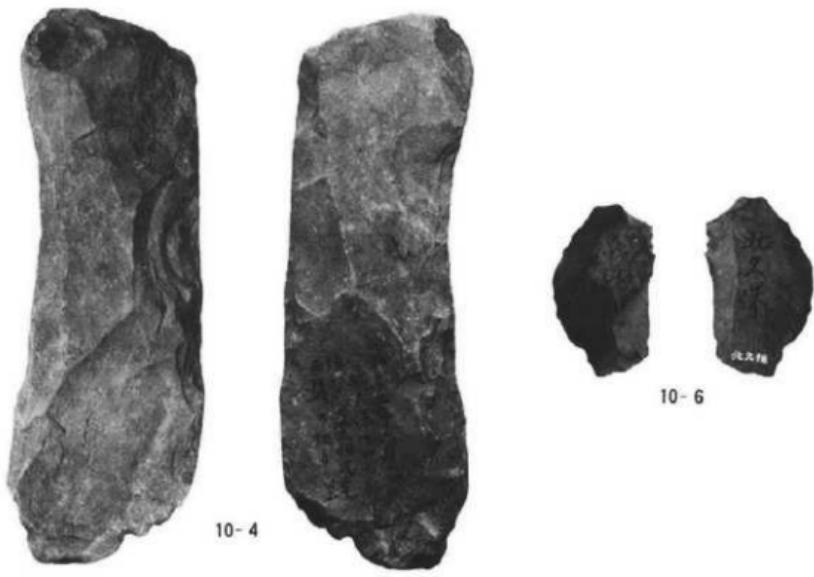
2. 北ノ久保遺跡 C 地点



出土遺物



9-1



10-6

10-4

既 出 遗 物

昭和61年3月10日 印刷

昭和61年3月20日 発行

北ノ久保遺跡

長野県上高井郡高山村

北ノ久保遺跡発掘調査報告書

編集 北ノ久保遺跡発掘調査団

発行 高山村教育委員会

串382 長野県上高井郡高山村大字高井4972

T E L 0 2 6 2 - 4 5 - 1 1 0 0

印刷 北信オフセット印刷株

串382 長野県須坂市大字小山1918

T E L 0 2 6 2 - 4 5 - 6 3 3 8

